

七支刀 雑考 (二)

— 山尾幸久氏の模造説を考える —

釋 円 正 (高坂孟承)

前号 (『古代朝鮮文化を考える』第三十号) で述べたように七支刀は、一部に日本での偽造説 (神功皇后を実証する目的で、『書紀』編纂前後に日本で作られたとする。藪田嘉一郎 1961¹⁾) の他、百済を介しての東晋の下賜品との (東晋で作られ、百済を通じて下賜されたか、東晋の命により百済で作られたとする。栗原朋信 1971²⁾) 説があるものの、百済王ないし百済王の関係者から、倭王にもたらされたものと理解されている。そして戦後も戦前のから支配的であった献上説がほぼ定説化していたが、1960年代になって朝鮮半島の出身の研究者である金錫亨が下賜説 (金錫亨 1964³⁾ 他) を発表し日本の古代史学会に大きなショックを与えた。それを契機として定説再検討の機運が高まり、活発な議論が戦わされてきたのは周知のとおりである。現在では、献上、下賜という上下の関係ではなく、平等の立場での贈与とみる見解が強まりつつあると思われる。

また、积文 (銘字の解読) の研究も進み、付表 1、付表 2 に示す通り、「音」か「晋」かのように未だ決着を見ていない銘字も若干残ってはいるものの、次第に見解の一致が見られる傾向にある。付表 1、2 は村山図録と言われる『石上神宮七支刀銘文図録』 (村山正雄 1996⁴⁾) の「七支刀銘积文比較表」以降の論文で小生の管見に入ったものを付け加えたものである。(同一研究者の积文は最も新しいもののみを掲載) 余談だが、村山図録は実物を詳細に観察出来ない研究者にも福音をもたらし、研究が大いに進んだとも言われ、実際小生などアマチュアも、おかげ様で研究者らの議論が理解し易くなった。

ところで筆者は、新たに积文をこころみるほどの力量はないのだが、以前よりこの銘文に違和感を抱いている。それは銘文の表裏いずれにも「造」という文字が含まれており、いずれも「(刀を) 造る」と解されていることである。积文は付表に示すように研究者により異なる解釈がされているものも多いが、この「造」は何れの研究者も「造」である。表裏何れにも「造」の銘があることに論理的な誤りがあるわけではないが、表面で「(刀を) 造る」述べているのに、さらに裏面で「(刀を) 造る」を繰り返す必要があるのだろうか。献上であれ下賜であれ、古代で国同士の物品のやり取りがあり、そこに意味のある文章が記されておれば、それは一種の外交文書なのであり、表裏が一体の文書であるのであれば、もう少し整理されていてしかるべきではないかと思うのである。表裏が一体の文章なのか、独立した文書なのかについては、あまり大きな議論がなされていないようであるが、早くから福山敏男氏 (福山敏男 1968⁵⁾) や榎本杜人氏 (榎本杜人 1954⁶⁾) らが指摘され、後述するように山尾幸久氏 (1989⁷⁾) が疑問を呈せられ、最近では濱田耕策氏 (濱田耕策 2015⁸⁾) が違和感があると述べられており、一人小生の思い違いではないと確信した。

では何故「造」が繰り返されるようなことが生じるのか。それは山尾幸久氏や、濱田耕策氏も指摘されているように、表面の象嵌を指示した主体と裏面の象嵌を指示した主体が別人であると考えれば起こり得ることなのである。

表面の象嵌を指示した主体と裏面の象嵌を指示した主体が別人であるのは、次の二つのケースが考えられる。

- ① 中国（おそらく東晋）からの下賜品、それには表面のみに象嵌はほどこされており、そこに百済で裏面に新たに銘の象嵌を付加して倭国に送った。
- ② 中国（おそらく東晋）から下賜されたものをお手本にして、百済で模造品を作成し、その際裏面に百済の文書としての銘を象嵌した。

このうち②については既に山尾幸久氏が『古代の日朝関係』の中で、「東晋製の“原七支刀”を模造し（表面の銘文を含めて）、裏面に倭王向けの説明的銘文を象嵌したのではないかと指摘されている。（前掲山尾幸久 1989）

山尾幸久氏は、七支刀の銘文についての疑問の他、銘字の書体は隸書と楷書の過渡期のもので、表裏とも文字の形によく似た特徴があり、同じ象嵌工人が細工したと考えられるが、表裏共に同じところで書かれ刻まれたとするには問題があるとし、幾つかの理由を挙げられている。詳しくは前掲の『古代の日朝関係』を見ていただきたいが概要を下に記す。

第一に「表面の書体は角張った横に引く字画も水平に近い、方格の文字が多い。しかし裏面の文字は少し丸みを帯び、かつ少し右下がりの文字が多い。（以下略）」（「」内は前掲山尾幸久 1989 より引用）とされ、よく似た字画もあるが、（表面の〔月〕と裏面の〔有〕の〔月〕等）異なるものもある。（〔刀〕等）

第二に、表裏で同一文字がかなり違う。（「造」）

第三に、表面の字形には中国後漢・三国・西晋時代の石碑等にしばしば見られるものが多く、くずし字が全くないが、裏面にはくずし字のような字形がある。

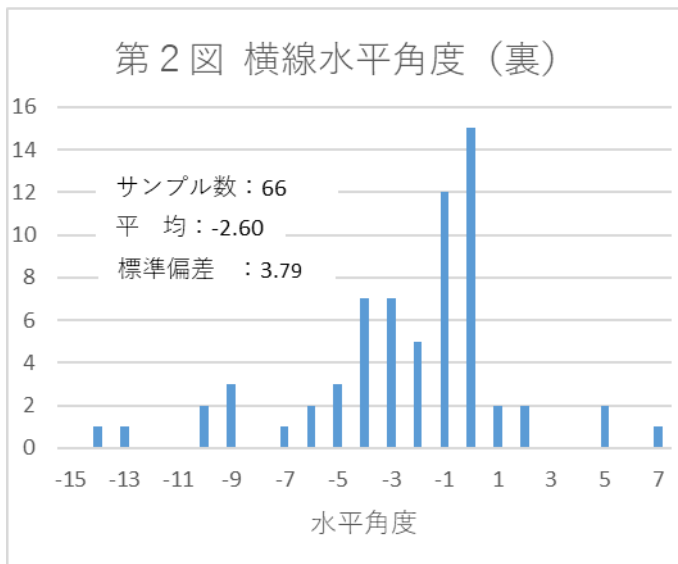
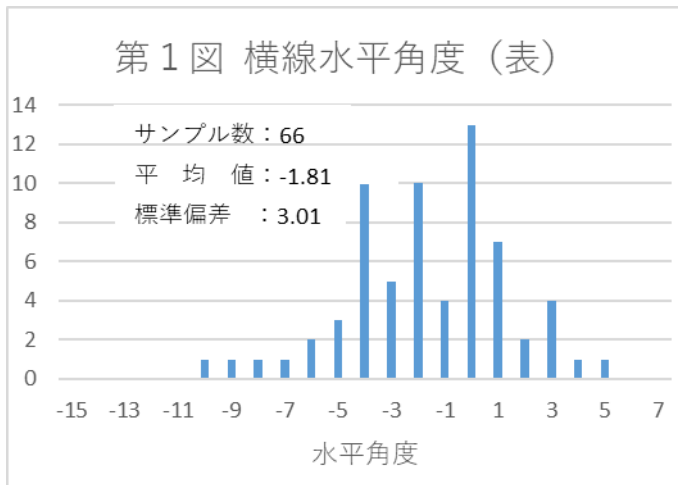
第四に、表面は均整を保つ文字が多いが裏面は比較的稚拙なものが多い。

山尾幸久氏の見解に対し濱田耕策氏は全面的に賛同されている一方（前掲濱田耕策 2015）、遠藤順昭氏は、「しかし、全体の銘字を検討してみたが、この論拠がどこにあるのか理解できない。横画の終筆が右に上がる特徴は西晋から東晋の時期のものであり、前掲の図七もこの特徴をもっている。（以下略）」（「」原文引用）とし、字体が異なるとは考えられないとされる。（遠藤順昭 1997⁹⁾）しかし、遠藤順昭氏の反論は、山尾幸久氏が挙げられた根拠に逐一触れられたものでなく、極論すれば、「書体が「銘石体」で立派なものだ」と概括的に述べられているに過ぎない。具体的な反証として挙げられた表面の「月」裏面の「有」の「月」部分と同じではないかとの指摘は、山尾氏も「似ている」例として挙げられたもので、遠藤順昭氏は、山尾氏の文をよく読まれたのか疑問にさえ思われる。また表裏面の「造」の銘の差異は、墓誌などでよく使用される「破体」に変えられたもので、字体が異なるものではないと言う指摘についても、山尾幸久氏もすでに認識されており、石文にこうした例があるとされている。遠藤順昭氏がこの「破体」は平板を避けるため

によく用いられるとされが、それが同一面であれば理解できるが、表面と、裏面では平板さを避ける意味が無いのではなかろうか。

筆者は、ここで書体論を展開するつもりもなく、展開しようにもその能力があるとは思っていない。しかし表面と裏面の銘字に何らかの差異を見出すことが出来なものであるかと考えていたところ、山尾幸久氏が述べられている「裏面は右下がりの文字が多い」という部分に気づいた。そこで、各銘字の横画の角度を測定して比較してみようと思い立った。

用いた銘文は前掲の『石上神宮七支刀銘文図録』の写真を拡大したもので、銘文の枠線と横画の交角を分度器で、0.5度単位で測定した。本来ならば投影機などで拡大して測定するか、画像をパソコンに取り込んで処理するか、もしくはその他の光学的測定方法を用いる等より精密に測定すべきであるが、もし表裏に差があるとするれば、簡易な測定法でもある程度の考察は可能であろうと判断した。しかし枠線も、



横画も鑿で細工したものであり、曲がり、湾曲があり、特に文字の横画は隸書体に近いものは湾曲したものが多く、定規で引いたような直線ではない。そこで、枠線は図録写真の一コマ単位で枠線のほぼ中央と思われるところを狙って線を引き枠線とする。枠線が湾曲蛇行している場合は、写真一コマの始点と終点を結ぶ線を枠線とした。横画も同様に、各々の横画のほぼ中央と思われるところを狙って線を引き、湾曲、蛇行しているものは始点と終点を結ぶ線を引き横画とした。そして横画と枠線の交角が直角である場合は0度し、右上がりの場合はプラス、合右下がりの場合はマイナスとして記録した。測定対象はの横画は、象嵌が残っているか象嵌溝が筆者が明確に読み取れるものに限定了。このようにして測定出来た銘字毎の横画は付表3の通りであり、測定結

果は第1図、第2図のとおりである。また付表2にt検定の結果を示した。

第1図、第2図のヒストグラムを見ると、表裏面とも頻度が最も高いのは0度すなわち水平で、横画は水平になるよう意図しているように見える。これから字体は横画が水平になるものを想定すべきであろう。筆者は漢字の知識が無いので、特定の字体を提示することは控えたい。

また平均値をみると表面は-1.81、裏面は-2.60と、いずれもマイナスで右下がり傾向であるが、裏面の大きくマイナスになっている2個のサンプルを除外した平均値でも-2.26となり、裏面の右下がり傾向が強いように思われる。念のためt検定の値を見るとp値は 3.89×10^{-7} で明らかに有意差がある。またバラツキも標準偏差が表面3.01、裏面3.79と差があり、ヒストグラムをみると表面は比較的まとまった感じがするが、裏面はバラツキが大きく感じられる。つまり表面と裏面では何らかの差があると考えてよいだろう。

では、この差の原因としてどう言うことが考えられるだろうか。まず第一に象嵌工人が表面と裏面で異なる。第二に工人の技量の時間的劣化、すなわち表面から細工し裏面に至って疲労などで粗雑になった。第三に表面と裏面の字体ないし書風が異なる。この場合、象嵌時に用いる銘文を記した原本が異なる場合も含まれる。

もし第一の象嵌工人の違いが原因であれば、表面と裏面のが一連の細工であったとすれば、表面と裏面を別々の工人が細工するということは通常考えられないので、百済が中国（おそらく東晋）から下賜されたものの裏面に細工したということになる。表面と裏面の細工が同一工人のものであるか否かは、象嵌技術の面から検討されなければならない。山尾幸久氏も述べられているように（前掲 山尾幸久 1989）一般的に象嵌工人は文字を十分理解しているとは考えられず、手本を見ながら文字を形として認識して細工するのであるから、結果として生じた銘字の差で工人が同じか否かは判断できない。七支刀の要素技術については、鈴木勉氏と河内国平氏により、実際に七支刀を復元製作して、精力的に研究がなされており、共著で『復元七支刀』が刊行されている。そこでは象嵌は表面裏面とも同じ工人の手によるものと結論づけられている。（鈴木勉/河内国平 2006¹⁰）

第二については、考えられないわけではないが、一国の王が細工命じるほどの工人であれば可能性は極めて低いであろう。

第三については、表面と裏面で全く異なると考える研究者は筆者の管見の範囲では見受けられない。漢字は時代により変化しているが、ある時代でもその時代より古い時代の書体がいられることも往々にあり、書き手により書体が混じることもある。また異体字も往々用いられ、この七支刀の銘文でも異体字とされるものが散見される。したがって、特定の書体に限定することは難しいのではなかろうか。表面と裏面の書体に際立った差異が指摘されて来なかったということは、書体の特徴にそれほど差が無いとということであろう。それでも、表裏面に差が感じられるということは、まさに山尾幸久氏が指定される通り表面の象嵌時に用いた原本と裏面の象嵌時に用いた原本が異なっていた可能性が高いのではないだろうか。

表面は、中国（おそらく東晋）からの下賜品、山尾幸久氏の言う「原七支刀」の

現物の象嵌をみて細工したので、比較的バラツキの少ないまとまった形になった。おそらく「原七支刀」の象嵌はもっと精美なものであったであろう。裏面は倭王向けの銘文を表面の字体に合わせて誰かが書き、象嵌工人はそれを手本に細工をしたのでであろう。銘文の原本自体に既にばらつきがあったのか、実物を真似るのではなく、原本を見ての作業のため象嵌工人の細工にバラツキが生じたのかはわからない。以上、筆者は山尾幸久氏模造説に賛意を表するものである。

なお全くの余談であるが、前掲の鈴木勉氏・河内国平氏によれば、七支刀は鑄造品である可能性が高いとされる。他にも鑄造品を示唆する研究者が入る一方、佐々木稔氏は鍛造品とされる（佐々木稔 1982¹⁰⁾）。物理的な試験を行えば簡単に結論が得られるが、何しろ石上神宮の神宝であり、実現の可能性は殆ど無いので、今後も論争が続くであろう。しかし、もし鑄造品であれば、象嵌を行うには表面を脱炭処理する技術が確立していなければならない。銘文に書かれたの製作年が、多数意見のように西晋の泰和（太和）四年（AC369）であるとするれば、既に百済では、4世紀の中ごろには、鑄造技術、脱炭技術が確立していたことになり、倭国では未だ鉄の製錬がおぼつかない時期で、彼我の技術レベルの差に驚くばかりである。

（了）

<参考文献>

- 1) 藪田嘉一郎「七支刀銘考釈・釈文篇」『日本上古史研究』第五卷第六号 1961.6、
「七支刀銘考釈・考証篇」『日本上古史研究』第五卷第七号 1961.7 日本上古史研究会
- 2) 「七支刀銘文についての一解釈」『論集・日本文化の起源 2』1971 平凡社
- 3) 金 錫亨『韓三国の日本列島内分国について』1964 朝鮮史研究会
- 4) 村山正雄『石上神宮七支刀銘文図録』1966 吉川弘文館
- 5) 福山敏男「石上神宮七支刀の銘文」『日本建築士研究』1968
- 6) 榎本杜人石「上神宮の七支刀」『MUSEUM』35 1954
- 7) 山尾幸久『古代の日朝関係』1989 塙書房
- 8) 濱田耕策「4世紀の日朝関係」『日韓歴史共同研究第1回報告書』2005
日韓歴史共同研究会
- 9) 遠藤順昭「石上神宮七支刀の銘字について」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社 1997
- 10) 鈴木勉／河内国平 編著 『復元七支刀』2006 雄山閣
- 11) 佐々木稔「七支刀と百練佚」『鉄と鋼』第68年第1号 1982 日本鉄鋼協会

付表3 横線角度測定値

積字番号	表										合計	平均値	積字番号	裏										合計	平均値		
	主な積字	サンプル数												主な積字	サンプル数												
1	泰	6	-4.0	-4.5	-6.0	-2.5	-4.0	-6.0			-20.0	-5.0	1	先	2	-20.0	-10.0							-20.0	-10.0		
2	和 始 初	0									0.0	0.0	2	世	1	-6.5							-6.5	-6.5			
3	四	2	3.0	2.5							5.5	2.8	3	以	1	0.0							0.0	0.0			
4	年	2	-3.0	-4.0							-7.0	-3.5	4	未 來 来	2	-6.5	-6.5							-13.0	-5.5		
5	一 四 五 十												5	秀 未	2	-0.5	-4.0							-4.5	-2.3		
6	一 月	3	1.0	-0.5	2.0						2.5	0.8	6	有	4	-3.0	-3.5	-3.5	0.0					-10.0	-2.5		
7	十	1	-2.0								-2.0	-2.0	7	此	1	-9.5							-9.5	-9.5			
8	一 六	1	0.5								0.5	0.5	8	刀 刃	1	-13.0							-13.0	-13.0			
9	日	3	0.5	-0.5	3.0						3.0	1.0	9	百	4	-1.5	0.0	0.0	-1.5					-3.0	-0.8		
10	丙	2	0.0	0.5							0.5	0.3	10	濟 濟 濇 濇 慈	4	-0.2	0.0	-1.0	-2.0					-4.5	-1.1		
11	午	3	1.0	3.0							4.0	1.3	11	王	2	-3.0	-1.0							-4.0	-2.0		
12	正	2	0.0	-2.5							-2.5	-1.3	12	世 也	2	-2.5	-1.5							-4.0	-4.5		
13	陽	4	-2.5	-6.0	-4.0	-2.0				-10.5	-4.9	13	子 世	0													
14	造	4	-2.0	-2.5	-3.5	-4.0				-12.0	-3.0	14	奇 身	4	0.0	-2.5	-2.0	0.0							-4.5	-1.1	
15	百	0											15	生	3	-1.2	-1.2	-1.0							-4.0	-1.3	
16	鍊 練	5	-4.0	-1.0	-1.5	-6.0	-1.5			-13.0	-2.6	16	聖	7	-1.0	-0.5	0.5	1.0	1.5	2.0	-3.0			0.5	0.1		
17	鍊 鉄 鐵 鉦 鋼	0											17	音 晋	4	0.0	-4.0	-3.5	-4.5							-12.0	-3.0
18	七	1	4.0								4.0	4.0	18	故 備	4	-2.5	0.0	4.5	-2.0							0.0	0.0
19	支 政 蓮 示	1	-4.0								-4.0	-4.0	19	為 爲	1	-0.5									-0.5	-0.5	
20	刀	1	0.0								0.0	0.0	20	倭 屨	1	6.5									6.5	6.5	
21	生 世 以 出 巨 帯	0											21	□													
22	壁	8	0.0	0.0	0.0	0.0	-3.0	-3.5	0.0	5.0	-1.5	-0.2	22	王	4	-6.5	-4.0	5.0	-4.5							-10.0	-2.5
23	百	3	0.5	1.5	0.5						2.5	0.8	23	旨 嘗 書 替 敬	5	-14.0	-6.5	-6.0	-1.5	-5.0					-30.0	-7.8	
24	兵	1	0.0								0.0	0.0	24	造	4	0.0	-1.0	-2.0	-4.0							-7.0	-1.8
25	百 宜	2	-3.5	-2.0							-5.5	-2.8	25	伝 傳 備	0												
26	供 復 備	0											26	不 示 示	1	-0.5									-0.5		
27	供	2	-1.0	-2.0							-3.0	-1.5	27	後 倭 后	0												
28	侯 侯	4	-0.5	-2.5	-2.5	-2.5				-10.0	-3.3																
29	王	3	-4.0	-10.0	-9.0																						
30	□ 永	0																									
31	□ 年	0																									
32	□ 大	0																									
33	□ 吉	0																									
34	作 祥	2	-2.0	-4.0							-6.0	-3.0															
35	祥	0																									
	合 計	66												合 計	66												

付表4 t-検定: (対の標本による平均の検定)

	変数 1 (表)	変数 2 (裏)
平均	-1.810606061	-2.598484848
分散	9.205885781	14.55553613
観測数	66	66
ピアソン相関	0.970842342	
仮説平均との差異	0	
自由度	65	
t	5.646326994	
P(T<=t) 片側	1.94404E-07	
t 境界値 片側	1.668635976	
P(T<=t) 両側	3.88807E-07	
t 境界値 両側	1.997137908	